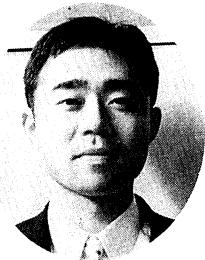


日々の想い

心機一転

鈴木博之



まみれでいると、七年前の日々がぼうつと浮かんできた。

七年前

スコップを持つ手がしびれた。寒さのせいだ。土も凍り、スコップが

金属音を立ててはね返される。ジャンパーの襟を立て、自分の吐く息で暖を取った。涙が出てきた。

一週間前まで、それこそ夜討ち朝駆けの広告会社に勤めていた。しかし、教員の夢がふくらみ、抑え切れず会社を辞めた。

教員免許を取る間、食べていくため土木作業に就いた。なまつていた体にはこたえた。

八月。本校ではPTAの奉仕による水生植物国建設が連日続いた。とにかく暑い。ふき出した汗が太陽の照りで蒸発し、またふき出す。にもかかわらず、働く父親たちはみんな陽気だ。

自分の力を注ぐように、スコップで土を掘っていく。

足手まどいにならないように土に

じつこにちよこんとしょっぱそうな塩びきと清物が乗っていた。弁当箱は傷だらけで、とても大きい。彼らはもりもとほおぱり、平らげる。圧到される食べぶりだ。ただ、入歯なので固い清物をおすそ分けしていたのには笑った。

筋肉にも驚いた。驚いたというより、若者なのに負けている自分がはづかしく思えた。彼らは筋肉を盛り上げ、土を掘つて、掘つて掘りまくった。掘ることで土から力をもらい、

その力を土に返すように、また掘つた。

掘り上げた土さえ、いとおしむように入大切にした。土に命があると感じさせるような仕草だ。

「よかつたな、あんちゃん。」

採用を知らせた時に、日焼け顔をくしゃくしゃにして喜んでくれた。

(大信村立大屋小学校教諭)

夢見るおばさん

村田奈緒美



私は、よく夢を見る。それも一晩にいくつも。映画なら差し詰め「三本立て」。映画と違うのは、無料であること、いつも完結するとは限らないこと。時間切れで、いい場面を見逃したことも少なくない。その続きを見たいと思っても、次の夜は全く別の話。一度だけ、二夜連続で続き

物を見たことがある。二晩目は完結編。小学二年生のことである。思え

ば、これが、私の夢見人生の始まりかもしれない。

最近見た夢では、我が息子を叱咤激励?している場面があった。

「もっと強くなれ!お母さんの子なんだから強くなれるはずだ。」

長い間農業で食べてきた彼らにとって、土は糧を生むものだ。土によつて生き、同時に土を生かしてきたのだと思つた。

親しくなつてから、彼らの生活は裕福で、ただ生きがいとして働いていることを教えてもらつた。

新しい道を歩きたくなつたとはいえ、不安だった自分には、彼らの生き方が何よりの励ましのように思え、彼らと一緒に働くのがうれしかった。